

5 長岡市のまつりと災害からの復興



山岸 孝広
YAMAGISHI Takahiro

長岡市 / 福祉保健部福祉総務課 / 企画係長
前観光・交流部観光事業課

毎年100万人が訪れる長岡まつりは、長岡空襲で亡くなられた人々の慰霊、復興に尽力した先人や支援者への感謝、恒久平和への祈りを込めて開催されている祭りである。祭りは被災地へどんな影響を与えるのだろうか。長岡まつりの起源、独自の取り組み、込められた想いについて紹介する。

リピーターの多い長岡まつり

長岡市は2005年4月1日から市町村合併が進み、現在は11の旧市町村により構成され、日本海から中山間地域までを含んだ人口約27万人の中核都市です。合併により地域だけでなく観光資源も比例して増加し、季節に応じた「地域固有」の特色あるお祭りが多数存在し、地域の宝として愛されています。その中でも、8月1日から3日間にわたって開催される「長岡まつり」は、昨今では長岡市の人口の3倍以上、100万人を超える観光客が訪れる新潟県最大のイベントです。

来場者へのWEBアンケートによると、リピーターが突出していますし、私たち自身を鑑みても、花火大会を待ち遠しく思い、毎年参加したくなる一大イベントであると感じています。なぜそう思えるのか。長岡市民にとって「長岡まつり」は華々しいだけでなく、特別な想いを持つ

ものであり、またその「想い」に共感する「長岡ファン」が増えてきているからこそ、待ち遠しく、そしてリピーターが多いイベントだと考えています。

長岡まつりの起源と込められた想い

毎年、華やかに開催され100万人以上が訪れる長岡まつり。その起源を紹介させていただきます。

今から70年以上前の1945年8月1日、午後10時30分。当時は第二次世界大戦の真っ只中でした。突然、空襲警報が鳴り響き、B-29大型爆撃機が長岡市に襲来。1時間40分にわたって市街地を爆撃し続けました。町中は焦土と化し、1,488名の尊い命が失われました。空襲から逃げ惑う市民。炎から逃げるために川に飛び込む市民。しかしながら、川面も爆撃の油で延焼しはじめ、当時の長岡市民は言い尽くしがたい悲しみと憤りに



写真1 長岡まつり大花火大会で打ち上がる復興祈願花火「フェニックス」(2018年)



写真2 国内外から多くの人が集まる大花火大会の会場



写真3 (左) 空襲で焼野原となった長岡市中心部 (提供:長岡戦災資料館)
写真4 (右) 長岡空襲で尊い命を失った戦災殉難者に対する慰霊の想いと恒久平和への願いを込めて灯籠を流す「柿川灯籠流し」

打ち震えていたといいます。

未曾有の空襲により一面が焼け野原となり、市長が殉職したため、復興は遅々として進まず、市民は将来を憂い、悲しみが続きました。この場面を打開したのが、当時の長岡市商工会議所の駒形十吉会頭です。奮起を市民に呼びかけ、今の長岡まつりの起源である「長岡市戦災復興祭」をスタートさせました。その開催の挨拶が記録に残されています。

「私共は今日その一周年を迎えて、まず犠牲者の身の上に想いを馳せ、そのご冥福を祈る真情切々たるものを覚えると共に、さらに遠く明治維新戦災焦土の状況も聞き伝えに想起して、今後復興のために如何に善処すべきかと(略)」

これは現状を悲観せず、まず慰霊者を慈しみ、決して後ろ向きにならず、今後のために何ができるのか、という決意と読み取ることができます。悲しみに打ちひしがれていた市民は駒形氏に賛同、奮起し、戦災復興祭を開催。「先を見据える心の復興祭」ともいうべき事業の開催を契機に、復興が加速したと言えます。

戦争は絶対にしてはならないという、当時の市民の共通の想いであった「慰霊」「復興」「平和への願い」という3つのキーワードは、70年以上経った現在にも脈々と受け継がれ、華々しい長岡まつりの根底にある原動力となっています。この「想い」こそが長岡まつりの最大の魅力であり、先人の想いを引き継ぎ、守っていくという長岡人の気質が、長岡まつり最大の特徴と言えます。

フェニックス花火のはじまり

未だに記憶に新しいですが、2004年10月23日にマグニチュード6.8、最大震度7を記録した新潟県中越地震が発生しました。長岡市内では建物損害被害9万棟以

上、死者28人をもたらす大災害となりました。

当然、市内は混乱し、インフラの復旧や復興に多額の費用が必要となり、行政は業務の中心を復興に注力しました。一方で、全国から様々な支援をいただき、日常生活を取り戻しつつある中で、次第に被災者の心のケアも必要となってきました。

まさにこの時に、支えてくださっている全国の支援者へ感謝の気持ちを発信し、閉塞感が漂っている地域を盛り上げたいという想いから、若い力が自発的に結集しました。自分たちができることは何か検討を重ね、現在の「フェニックス花火」を生み出したのです。

当時の長岡まつり大花火大会は、長岡市長が会長を務める長岡まつり協議会が主催していました。戦後から長く続く花火大会に、市民団体が独自で行うフェニックス花火の打ち上げは、当初は受け入れられず、花火大会終了後の番外に「震災復興祈願花火打上実行委員会」の提供として、市民の力により打ち上げられたものでした。

番外として打ち上げられた「フェニックス花火」は、



写真5 中越地震で甚大な被害を受けた長岡市山古志地域(旧山古志村)。地震で土砂が崩落し、川がせき止められて集落が水没し、住民は「全村避難」を余儀なくされた



写真6 初めて打ち上げられたフェニックス花火(2005年)

幅1.6km、当時合併した新たな6市町村の意味合いを持たせた6カ所で打ち上げを行い、結果として長岡まつり大花火大会のフィナーレを飾りました。当時の長岡市では想像を超えたビッグスケールでした。この他にも、復興活動のラジオやTV中継等でよく使用されていた平原綾香さんの『Jupiter』をテーマ曲とした初の「ミュージック付き」花火の打ち上げにより、多くの被災者の心を慰め、全国の支援者に感謝と元気な姿を発信し、多くの来場者の心を打ちました。

震災から1年も経たず、花火大会の中止も囁かれた中、大成功となりました。これは、長岡花火を支える人々に、戦後の幾多の試練を乗り越え復興を果たした「長岡人」の魂が脈々と受け継がれている証と私は考えます。

被災地へ「今こそ届けよう、感謝と勇気」

中越地震後にスタートしたフェニックス花火はその後も毎年打ち上げを続け、「復興のシンボル」という無くてはならない存在になっています。

日本の歴史の中で、未曾有の大災害となった東日本大震災が発生した時には、長年続いてきた「三尺玉」のポスターを一新し、フェニックス花火の写真を起用しました。さらに写真と共に写り込んでいる長岡市の大手大橋を引用し「この橋のむこうに、希望が待っている。」とキャッチコピーを入れ、東日本大震災の被災者を花火観覧席に招待しました。当時の長岡まつりのコンセプトを「今こそ届けよう、感謝と勇気」と定め、東日本大震災の被災地へ復興を遂げた長岡市の姿を届けさせていただきました。



図1 東日本大震災の被災地へのメッセージを込めた「2011年の花火ポスター」

そして、東日本大震災の被災地の一つ、宮城県石巻市でフェニックス花火を打ち上げ、被災地にエールを送りました。

長岡花火財団を設立

このように、長岡まつりは時代と共にその意味を深化させ、現在では市内の小中学生が率先して「長岡花火」の起源を学び、ふる里愛を育む環境が整いつつあります。一方で、長岡花火を使ってどのようにプロモーションしていくのか、増加する来場者の混雑を解消し、安全・安心な会場をどのように整備していくのか、といった課



写真7 小中学生に長岡花火の起源を伝える活動

題も浮き彫りになってきました。

この問題を解決するために、長岡まつり協議会長であった当時の森民夫長岡市長は、行政が事務局を担うのではなく、年間を通じて「長岡花火」に特化して活動を行う民間ベースの「一般財団法人長岡花火財団」の設立を決定しました。大きな骨子や法人の理念については、民間団体や企業の代表らに検討を委嘱し、2017年4月に長岡市が設立者となり、長岡花火財団が誕生しました。

この財団では「長岡の誇りを次世代に」をキャッチフレーズに、長岡花火（ふる里）への愛着を醸成するために、職員自らが市内の小中学校に出向き、長岡まつりの原点を伝えるとともに、花火筒・花火玉のレプリカを持参して、そのスケール感を肌で感じてもらう活動等を実施しています。

この他にも、発信力が高い長岡花火をブランドリーダーとして、地域商品とコラボレーションしながら積極的に売り出したり、民間企業とタイアップすることで活動資金を集め、これを花火プロモーション事業に充てるといった循環的事業展開を実施しています。

これからの未来へ

ここ10数年の間、日本では災害が多発しています。

冒頭にも記載しましたが、長岡市では長岡空襲後の悲壮感が漂う中で、市民自らが気持ちを奮い立たせ、自発的に戦災復興祭を開催しました。過去には幕末の動乱期にも、新政府軍と戦った北越戊辰戦争により長岡城内は焦土と化しましたが、一度落とされた長岡城を奪還。歓喜した市民（領民）は、長岡甚句を踊ったという逸話もあります。

これらの歴史からも推察できるように、避けることのできない災害で疲弊し、閉塞感が漂う状況を打開する

ために「祭り」は開催され、市民の心を支えてきました。祭りの実施は市民自らの発意であり、地域住民の理解と協力が必要です。被災直後の実施には強力なリーダーシップや大義が必要です。また開催に至るまでには、多大な労力や協議が必要ですが、過去にはこれら乗り越え、祭りを開催してきました。

私たち長岡市民は、これら先人の苦労や功績、時代背景を学びながら、今後も数々のイベントを実施していくことと思います。そして華々しく、市内外から人々が訪れ、皆が楽しむお祭りですが、私たちはその根底にある「意義」を忘れずに、心の奥底に育み、そして次世代へとバトンが渡っていくことを確信しています。

現在、長岡市は2020年の完成を目指して道の駅「ながおか花火館（仮称）」を建設しています。この建物には、華々しい長岡花火の様子だけでなく、過去の歴史も展示される予定です。たくさんの市内の子どもたちが施設を訪れ、長岡花火の起源を学び、そしてふる里愛を育んでいくでしょう。同時に長岡花火財団は、花火大会を運営しながら、年間を通じて長岡花火をプロモーションしていきます。

長岡花火は国内にとどまらず、日米友好の架け橋ともなりました。戦後70年の節目の2015年8月15～16日（日本時間）には、姉妹都市の米国ハワイ州ホノルル市の真珠湾で長岡花火を打ち上げました。両国の戦争で亡くなられた方々の慰霊と世界平和、青少年の健全な成長、両国・両市の発展の願いを込めて。平和を願う長岡花火で、70年の時を超え皆が一つになったのです。

近い将来、今の世代だけでなくこれからの世代が、胸を張って「長岡花火はふる里の宝」と言える時が必ず訪れます。それは、長岡花火が長岡市のブランドリーダーとして確立されることであり、このような土壌が整うことでイベントに誇りが生まれるのです。

多くの災害から長岡市は立ち上がってきました。その手段の一つとして市民発意の「祭り」があり、長岡市行政も寄り添いながら開催し、祭りを深め、高め、そして「心のよりどころ」としてきました。たとえ今後、未曾有の災害があっても、そして他の地域に同じようなことがあっても、長岡市は祭りを開催する「意義」を持ち続けながら、自分たちだけでなく、国内外に発信していくことと確信しています。

<参考資料>
1)「長岡大花火 祈り」長岡まつり協議会 2006年
2)「復興祈願花火フェニックス記念誌『十年のキセキ』」長岡まつり協議会フェニックス部会 2014年